コース名	氏名	専門分野内容
哲学コース	岩田 圭一	古代ギリシア哲学、とくにアリストテレスの存在論や倫理学を研究している。アリストテレスの『形而上学』を中心とする諸著作の研究を通じて、〈ある〉ということがどのように問題にされるのかを明らかにするとともに、私たち人間のあり方について考察している。
哲学コース	鹿島 徹	哲学
哲学コース	小島 雅春	現代英語圏哲学の研究に依拠しながら、感情を「理解」することを目指す。この「理解」の先に、感情の治癒に関わる行為としての哲学の可能性を展望する。
哲学コース	小林 信之	美学研究、感性文化論、ハイデガーを中心とする現代哲学研究。具体的には、知覚や感情の現象学的研究を主要フィールドにしつつ、視聴覚文化、身体や死の問題にも目を向けてきた。また西田幾多郎、九鬼周造、三木清らの近代日本哲学における美学的・文化理論的思想についても研究を進めている。
哲学コース	田島 照久 (学生募集なし)	①ヨーロッパ中世のドイツ神秘思想。とくにマイスター・エックハルト、ヨハネス・タウラーの思想を中心とした研究。ローマ・カトリック教会の神学的伝統内での思想史的位置付けというこれまでのヨーロッパ研究者の基本的な立場に対して、ギリシア教父以来のテオオシス(人間神化)の伝統に直接連なる思想系譜として捉えなおすことを試みている。また宗教哲学の立場から神認識と自己認識の相即という事態を問題にしたいと考えている。②キリスト教のヨーロッパ土着化の問題。宗教民俗学の領域から、民衆におけるキリスト教の具体的な信仰の姿を浮かび上がらせようと試みている。③キリスト教図像学。アイコンとキリスト教教義の研究。
哲学コース	御子柴 善之	研究上の専門分野は、ドイツ近現代哲学ならびに倫理学である。ドイツ近現代哲学では、特にカントの実践哲学について、道徳の最上原理の提示からその体系的展開にいたる全体像を研究している。また、カントとその周辺の哲学者における「意識」の理論を検討している。倫理学では、現代社会の諸問題に対峙する倫理学を(世俗化した社会における)社会倫理学として構想するのが課題である。これらの研究を通して、現代社会の倫理的諸問題を古典的な近代哲学との対話において解明することを目指している。また、ドイツならびに日本の研究者たちと共同して、カントの世界市民概念を手がかりとして、「グローバル化時代における倫理学」を多様な観点から研究している。
哲学コース	村松 聡	①生命倫理学を中心とした応用倫理学が研究テーマ。近年は徳倫理の可能性とその復権を研究の中心としている。②パーソン論を中心として、人間理解が研究テーマである。とくに他者論、身体論の二つの点から人間の独特な存在の仕方を探求している。
東洋哲学コース	大久保 良峻	漢文文献を中心に仏教の教学研究を行っている。特に平安仏教、すなわち複合的な要素を持つ天台宗と、密教を基軸とする真言宗の教学に注目している。それらは中国仏教とは直接的に繋がっているため、中国隋代や唐代の仏教も研究領域となる。具体的には天台学や密教学が中心になる。そして、日本天台では最澄以来、法華教学・密教・禅・戒という四宗の相承が言われ、後には浄土教や山王神道も重要な法門となるように、諸分野の研究も課題となっている。その他、中古天台の本覚思想と言われるような天台教学を根幹とする現実肯定思想の検討もしている。比叡山出身者の多い鎌倉時代の仏教やそれ以降の教学展開も解明すべき課題となっている。
東洋哲学コース	土田 健次郎	中国と日本の近世思想を専門とする。 中国については、宋・元・明・清の儒学が中心だが、仏教や道教との関係も視野に入れている。研究業績としては、宋代道学形成史、朱熹(朱子)の思想分析などがある。大学院の授業は朱子学を軸とするが、陽明学をはじめ当該時代の他の諸思想も指導の範囲内にある。 日本については、江戸時代の儒学が中心だが、神道や国学も視野に入れ、中国思想との関係にも留意している。研究業績としては、古学や日本朱子学の思想分析などがある。大学院の授業は現在は国学文献、江戸儒学文献などを取り上げているが、当該時代の他の諸思想も指導の範囲内にある。
東洋哲学コース	森 由利亜 (学生募集なし)	中国近世の神仙信仰、全真教、道教、内丹思想などを専門に研究する。特に、明末清初から民国初期に至る全真教の展開と、その伝統の再構成において、呂祖を信仰する数々の扶鸞結社が関与している事実を集中的に指摘してきた。『太乙金華宗旨』や『道蔵輯要』といった文献がまさしくそうした結社の中で作られてきた事実も、こうした研究過程で明らかにした点である。現在は、重刊『道蔵輯要』の成立を調査する過程で、清朝から民初にいたるまでの四川での全真教の展開にも興味をもっている。現在は、伍守陽の諸著作の研究を基礎に、近世内丹道の展開にも視野を構築していく過程にある。

コース名	氏名	専門分野内容
東洋哲学コース	山部 能宜	インド大乘仏教の学派の一つである唯識学派の教学と中央アジア(新疆)における禪観の展開を研究テーマとしているが、そこに通底するキーワードは禪定である。インド唯識学派の研究においては、禪定の実践における身心の相関関係に特に注目し、本学派最古の教義文献である『瑜伽師地論』を文献学的に分析することによって、我々の身心をつなぐ生理的・心理的基盤としてのアーヤ識説を実践的観点から解明することを目指している。中央アジアの禪観の研究では、文献学的手法とフィールドワーク的な手法を併用し、美術史や考古学的な成果も参照しながら、学際的な観点から往時の修行者達の実践の総合的な解明を試みている。
東洋哲学コース	吉原 浩人	日本宗教思想史、東アジア文化交流史専攻。日本の平安時代から室町時代に至る思想・宗教・文学全般と、中国・朝鮮半島の思想・宗教・文学との関係を考察している。 特に、勸学会を中心とする撰関期の宗教・文学と白居易の関係、永観・大江匡房を中心とする院政期の宗教思想・文学、八幡信仰・熊野信仰・伊勢信仰などの神社信仰、本地垂迹説、神観念、浄土教を中心とする仏教学、寺社縁起と霊場信仰、中世神話と中世神道、説話文学、仏教文学、和漢比較文学、絵解きなどのテーマで研究を行い、論文執筆を行っている。また、これらの研究分野において、学生の指導を行うことができる。
東洋哲学コース	渡邊 義浩	専門は、中国古代思想史。これまでは、三国時代の研究を中心としており、映画「レッドクリフ」の日本語版の監修や、吉川英治『三国志』の解説などを行っている。研究を進めるにつれ、時代が広がり、関心が思想史を中心とするようになり、現在は、いわゆる「諸子百家」と呼ばれる先秦の思想家たちから、唐代の儒教・仏教・道教まで、中国古代思想史全般の研究をしている。最近では、『論語』や新出資料などに関心を抱いているが、「三国志」の研究を辞めたわけではなく、事務局長として三国志学会を主宰し、その普及にも努めている。
心理学コース	大藪 泰	乳幼児期の社会的認知の発達を研究の対象とする。とりわけ、人間の精神活動が生み出してきた文化という意味の世界へ、赤ちゃんがいかに参入するかに関心がある。情動性、静観性、間主観性、共同注意、自己感、他者感、シンボル、文化学習などが研究領域になる。
心理学コース	小塩 真司	パーソナリティなど人々の心理学的な個人差に注目し、その測定方法の開発や適応・不適応との関連、また発達過程に注目して研究を行う。
心理学コース	越川 房子	専門分野は、心理療法における認知行動的アプローチである。認知行動的アプローチは、1980年代にはいて、行動的アプローチと認知的アプローチを統合して生まれた比較的新しい心理療法の技法である。特に、うつ病と不安に関する理論研究、治療効果の実証研究において優れているが、最近では、犯罪者の再犯予防介入に積極的に導入されたことでも知られている。研究指導領域は、認知行動的アプローチの効果研究、アセスメント、介入技法の開発、病理論、日本における適用の問題、およびこの分野で近年注目を浴びているMindfulness-based Cognitive Therapyの主要技法である瞑想をはじめとした東洋的に行法の理論と効果研究などである。
心理学コース	杉田 陽一	感覚受容器官で捉えた情報を、受動的あるいは機械的に処理しただけで、主観的な知覚印象が形成されません。視覚系と聴覚系は、情報源が自分から遠く離れているので、情報が受容器官に届くまでの間に減衰したり、あるいは余計な信号が混入したりすることが避けられません。感覚系は、不必要な情報をそぎ落とし、不足している情報を能動的に補完して、鮮明な知覚印象を創り上げています。このメカニズムを、様々な実験手法を使って明らかにしていきます。
心理学コース	竹村 和久	担当者の専門研究分野は、社会心理学、行動意思決定論、経済心理学である。特に、社会的状況における人間の判断と意思決定の定性的分析、数理モデル構成、計量的分析を行っている。最近では、潜在的連想テストによる社会的認知研究、過程追跡技法による多属性意思決定過程研究、状況依存焦点モデルによる意思決定分析、描画の画像解析研究(テキストチャー解析、特異値分解、フーリエ解析、ウェーブレット解析など)、社会的規範意識と価値の社会調査研究、アイカメラを用いた意思決定における選好形成過程の研究、社会的変化検出についての数理計量分析などをテーマとしている。 応用分野としては、マーケティング政策、経済政策、リスク・コミュニケーション、社会的合意形成などになる。また、理工学系、医療系、社会科学系の研究機関との共同研究も、行っている。
心理学コース	豊田 秀樹	心理計量ゼミでは、心理学を基本としながら、理論と実践の双方に同程度の重きを置いて、データ解析マインドを養います。データ解析とは、客観的なデータから、現実的な要求に応えるための知見を得るための学問です。また情報化社会に対する豊かな感受性を養い、データ解析に必要な計算機の知識を身に付けます。実社会に目を向け、マーケティング・サイエンスをおもな活動領域として、広い意味での心理統計学を研究します。就職の面接で「大学院時代に何を勉強しましたか」と尋ねられたら「心理学を基本に据えたデータ解析を勉強してきました」と胸を張って答えられるようになってもらいたいと願っています。

コース名	氏名	専門分野内容
心理学コース	日野 泰志	文章を読む際、その文章を構成する語の意味が復元されなければならない。語の意味を復元するには、視覚的に与えられた情報をもとに、私たちが保持している語彙知識を検索する必要がある。語の綴り・発音・意味などの語彙知識は、どのような形式で保持されているのだろうか。また、これらの語彙知識を検索するプロセスはどのような特徴を持っているのだろうか。私は、心理実験やコンピュータ・シミュレーションを通して、このような語の読みに関する諸問題を研究している。こうした研究を通して、語の認知プロセスの解明ばかりでなく、人が持つ情報処理システムの構造や特徴を理解することを目標としている。
心理学コース	福川 康之	ヒトの心身の健康には、ストレス、性別、パーソナリティ、社会的ネットワークなど、様々な要因が関係している。当ゼミでは、これら健康関連要因の諸機能について、進化や適応の概念を視野に入れながら研究を進めている。さらに、その応用としてのストレスマネジメント方略や健康行動促進のためのプログラム開発なども行っている。特に、高齢者を対象とした研究においては、健康長寿やQOLの向上をもたらす心理学的要因の解明を目指している。
心理学コース	福澤 一吉	脳損傷による認知活動の選択的障害を研究するねらいは健常の認知過程の理解と、認知理論に対する生物学的制約条件の提示である。認知神経心理学は健常の認知理論を神経心理学的症状の説明に適用し、病理と健常の認知過程の理解を試みる脳神経科学である。福澤ゼミでは脳損傷に由来する書字運動の障害(失書)、行為障害(失行)の背景にある運動の問題点を運動の計算理論モデルを背景に解明することを進めている。
心理学コース	藤野 京子	非行現象とそれ以外の不適応行動・症状とを比較して、その類似点・関係性や相違点を研究したり、上述のような不適応行動・症状を示さない者との差異を研究している。なお、不適応行動・症状とは、個々人の問題のみに帰することはできず、社会との相互作用の中で生じるものであることから、犯罪学などの観点をも取り入れて検討を行っている。このほか、非行をはじめとする不適応行動・症状を示す者への効果的な支援や予防策についても臨床心理学的見地から研究している。
心理学コース	松本 芳之	社会的存在である人を心理学の視点から考察するために、社会的紛争場面における人々の行動を中心に研究してきました。中でも、場面状況を利用することで、自分の主張や要求の正当性を相手にどう理解させるかが、紛争の推移や解決の過程に大きな影響を及ぼすという点に焦点を当ててきました。それらを研究するための方法として、実験と質問紙調査以外にも、内容分析、質的分析、実験の代替法としての役割演技法などの多様な手法を試みています。
社会学コース	浦野 正樹	都市社会学、地域問題、災害社会学。 ここ数年は、多様な住民階層問題やエスニック・プロブレムズ等の、都市の社会的構成の複雑さに起因する社会問題に焦点をあてながら、都市の社会構造を考察することに主眼をおいて研究を進めている。なお、地域問題に接近する時の視点としては、今まで、〈都市－農村(中央－地方)〉関係、〈先進国経済－第三世界〉関係、近代化のプロセスと都市の歴史的発展、現在の日本の都市が抱える諸問題(資源エネルギー循環、都市災害、土地住宅問題等)を重視して研究をすすめてきている。
社会学コース	大久保 孝治	個人が自分の人生を語る(告白する)という行為自体がすでに近代的な現象であり、「人生の物語」はその時代その時代の社会(あるいは国家)のありようを反映していると考えられる。近代日本人の「人生の物語」(生き方をめぐる規範と語り口)の生成と変容の過程を、ポピュラーカルチャーやライフストーリー(口述生活史や自伝、インタビュー記録など)、並びに社会意識調査のデータの分析を通して、明らかにしていく。
社会学コース	木村 好美	社会階層に関する理論的・経験的研究
社会学コース	草柳 千早	「相互作用としての社会」という方法的視点から社会問題、社会関係、自己、身体等の諸問題を研究する。その一環として、1)個人的とされるさまざまな問題がよりマクロな社会問題へと媒介されていく過程の理論的・経験的に研究、2)間身体的な過程としての相互作用分析等をすすめている。
社会学コース	嶋崎 尚子	社会学の分類にしがたえば、家族社会学、ライフコース論、社会変動論、歴史社会学といえる。社会的分析次元間の連結を目指して理論的・方法的・実証的研究をしている。空間的には、マクロ－ミクロの連結であり、時間的には、時代・コーホート間の比較である。

コース名	氏名	専門分野内容
社会学コース	竹中 均	広い意味での比較社会学的なアプローチに関心がある。このアプローチ自体は広範な適用範囲を持つが、興味を持っているのは、比較社会学的な視点から自閉症をめぐる問題を論じることは出来ないだろうかという点と、民藝と呼ばれる工芸文化をやはり比較社会学的な視点で論じられないだろうかという点である。両者は全く別物に見えるが、どちらも、今ここにある社会のあり方を比較のパースペクティブの中で見直したいという趣旨では通底していると思われる。
社会学コース	田辺 俊介	経験社会学、社会意識、社会調査方法論
社会学コース	土屋 淳二	文化変動論、集合行動論、感性社会学、ファッション産業論・市場分析、社会学説史研究。
社会学コース	那須 壽	理論社会学、現象学的社会学、社会学説史、知の社会学、社会運動論、運動組織論
社会学コース	山田 真茂留	理論社会学、組織社会学、宗教社会学、集合的アイデンティティ研究、現代社会論、現代文化論
社会学コース	和田 修一 (学生募集なし)	1. 合理性の社会学1[生きがいの論理と社会秩序の論理]:(わが国においては「生きがい」、英語圏においてはWhat makes life worth living という)人生の意味づけの論理における(個人レベルでの)合理性判断・合理的選択と(経済的合理性判断、倫理道徳的・価値的合理性判断といった)社会的価値判断の論理との間の整合性と矛盾点を、比較制度(文化)論の視点から明らかにする。 2. 合理性の社会学2[歴史的合理化再考]:前近代社会の機構の中にその源を持つといわれるパターンリズム・イデオロギーの近代化プロセスにおける質的・機能的変化の筋道を辿ることによって、近代化を「合理化」として把握する歴史観の問題点を明らかにする。
教育学コース	梅本 洋	教育哲学(特に教育における価値・規範にかかわる諸問題、教育行為論、教育学的知識論、教育論言説における言語使用の問題など)および教育思想(特にルソー、ペスタロッチ、フレーベル、デュエイなど西洋の近現代の教育思想)。
教育学コース	沖 清豪	高等教育論(教育社会学)および教育制度・行政学(イギリス教育改革)を主たる研究領域とします。高等教育論については、主として教育機能をめぐる諸改革(大学の教育機能評価・初年次教育・キャリア教育・大学認証評価・指導法研究・教師教育をめぐる改革等)の調査研究を軸としつつ、特に私立大学の機能変容(職員の専門職化の可能性と課題、経営改革と現実の課題、Institutional Researchの導入)や学生支援のあり方の転換(異議申立の制度化等)に関心を持っています。イギリス教育改革については、1980年代以降の高等・継続教育改革、および学校評価制度や教育課程改革について、研究を行なっています。
教育学コース	喜多 明人	子ども支援学 子ども環境学、教育学、教育行政・学校経営学の研究。 子どもの自己肯定感を励ます子ども支援学や子どもの自分育ちに欠かせない子ども環境、まちづくり学、総じて子どもの人権・参加論(子どもの権利条約研究)を中心としつつ、学校の教育環境・運営組織・教職員論、家庭・地域・福祉論などの視点から総合的な考察を行う。
教育学コース	細金 恒男	教育政策、学校制度の研究:日本の中学・高校制度改革、中高接続問題、イギリスの中等教育・職業訓練システムの改革(地域と教育)研究:戦後日本農村の変容と学校教育の関係、地域開発問題と教育、農と農村社会のもつ教育力、社会的排除(social exclusion)問題と教育、等に関する研究。
教育学コース	増山 均 (学生募集なし)	社会教育学。とりわけ児童・青少年期、在学青少年の社会教育、学校外教育についての研究。この分野は、児童福祉、少年司法、子ども文化、子育て文化なども重なる領域であり、それらの領域をつないでアプローチする。研究テーマは、①児童・青少年に即しては、「居場所づくり」、「社会参加・参画と自治」、「余暇・遊び・文化の権利」問題について、②環境づくりの側面については、「子育て支援」「子育てネットワーク」「地域の教育力再生」問題である。現在の具体的テーマとしては、①地域の教育力再生に向けての世代間交流、子どもと高齢者の相互教育力の問題について、②社会教育学の基本概念としての社会文化アニメーションについての研究を行っている。
教育学コース	村田 晶子	社会教育学専攻。成人の学習論、近代日本社会教育史研究を主たるテーマとして研究している。成人学習論研究では、公民館などで行われてきた社会教育実践に関与しつつ成人女性の教育・学習の歴史と学習論の研究を中心としている。さらに社会教育職員等の対人援助職の専門的力量形成の実践的研究を行なう。研究指導においては、近年の母子・父子関係論、家庭教育論、ジェンダー、セクシュアリティの議論を視野に入れて指導を行う。

コース名	氏名	専門分野内容
教育学コース	山西 優二	国際教育学。 国際教育・国際理解教育・開発教育の実践研究及び理論研究。 地域や文化、参加型学習、教材などの観点からみた国際理解教育・開発教育に関する研究。 開発と教育に関する研究。 地域にみる国際交流・国際理解・国際協力の関連に関する研究。 NGOによる教育協力・開発教育に関する研究。
日本語日本文学コース	池澤 一郎	日本近世文学を専攻する。特に近世から近代にかけての邦人の手に成る漢詩漢文の解析に研究が集中している。また漢文戯作から洒落本、黄表紙、読本といった近世後期の小説の史的展開にも関心が及ぶ。漢詩文プロパーではなく、俳諧や和歌など他の韻文作品との関係、散文作品における引用漢詩文の機能などに興味をいだき、いくつかの論をなしている。近時は掛け軸などの草書体の漢詩文を読む機会が多く、日本文学研究、中国文学研究におけるこの分野の遅れを痛感している。
日本語日本文学コース	上野 和昭	専攻する分野は日本語学、そのなかでも日本語史(とくに音韻史・アクセント史)である。現在は、仏教界に伝わる論議書に記された漢語アクセントについて調べている。これまで、近世の京都アクセントを江戸時代の平曲譜本と現代の京阪式方言から研究するなど、発音注記の付された文献を方言音声と比較しながら研究してきた。言語ならびに言語資料に対しては、つねに「歴史と現在」という二つの立場の融合を心がけ、時間と空間の交差するところに、現代に至る日本語史を構築したいと考えている。
日本語日本文学コース	兼築 信行	藤原定家を軸とする中古・中世の和歌文学を専門とする。前近代の和歌表現史や、歌人・歌壇の研究を広く行っており、カバーする時代は近世さらに明治期まで及ぶ。また歌書の文献学的なアプローチ、和歌に関する作法など歌学に属する領域にも研究業績を有する。
日本語日本文学コース	河野 貴美子	和漢比較文学、また特に、書物(漢籍)の伝来とともに、中国の学術・文化が古代日本においていかに受容、摂取されてきたのかを明らかにすべく、研究に取り組んでいる。主たる研究対象は、説話や詩文集、仏典を含む各種注釈書など奈良・平安期の漢字・漢文による著作と、漢魏六朝から隋唐に及ぶ中国古典籍との関係であるが、最近では、現代に至るまでの日本における中国学の展開、和文と漢文の歴史的関係、古典籍研究をめぐる日中間の学術交流史などの諸テーマにも関心をもっている。また、朝鮮や渤海なども含め、東アジアの文化・文学・ことばの世界をより広い視点から捉えることをめざし、研究を進めている。
日本語日本文学コース	陣野 英則	平安時代の文学(中古文学)、特に物語文学を主たる研究対象としている。これまで、『源氏物語』の言葉、語り手、話声(narrative voice)、〈書く〉こと、読者、受容などの諸問題について調査・検討を重ねてきた。『源氏物語』以外では『うつほ物語』『堤中納言物語』などを考察の対象とすることが多い。さらに近時は、10世紀後半から11世紀前半あたりまでの撰閲家とその周辺で生成・享受された文学全般を対象として、仮名が用いられている文学(物語・日記・和歌など)の諸ジャンルすべてを包括するような視座からの探究をめざしている。一方、中世・近世の『源氏物語』古注釈の展開に関心を抱き、未翻刻の注釈書の紹介などにも取り組んでいる。
日本語日本文学コース	高梨 信博	日本語の歴史。時代および分野としては近世の語彙と表記を中心とするが、前後の時代についても視野におさめながら研究をおこないたいと考えている。特に、近世を中心とする辞書の歴史について研究をおこなっているが、辞書にとりこまれた日本語が同時代の日本語の姿をどのように反映しているのかを知るために、辞書以外の文献資料も広く取りあげ、正確に読解していきたいと思う。
日本語日本文学コース	高橋 敏夫	広津柳浪、悲惨小説から、村上春樹、ホラー小説まで、近代・現代文学のほぼ全般を対象に、研究と批評を展開する。とくに小説とメディア、文化、社会、国民国家との関係に関心をもつ。方法的にはロシア・フォルマリズムとB・ブレヒトによって提起された「異化」概念を社会化することで、M・バフチンの文化記号論、R・バルトの文化批評、M・フーコーの権力批判等とつなげ、文化研究やポストコロニアリズムも積極的に吸収。近年では、①『大菩薩峠』にはじまる大衆文学のモード研究、②オキナワ文学、アイヌ文学のマイナー文学的考察、③夏目漱石から村上春樹・龍にいたる「戦争・戦場・戦闘」文学の検討、④1970年代以後の現代演劇批評、にとりくむ。
日本語日本文学コース	高松 寿夫	『万葉集』の和歌をおもな研究対象としつつ、7世紀から8世紀にかけての、和歌史の展開に関心を持って、これまで研究を続けてきた。また、上代から平安朝の前期にかけて、どのように和歌史が連続するのかといったことにも、近年、強い関心を抱いている。加えて、同時期の散文についても、特に漢文の創作、その前提としての漢籍受容といったことに関心をもって研究している。上代の韻文・散文いずれの研究を志す場合でも、研究指導を受け入れる用意がある。

コース名	氏名	専門分野内容
日本語日本文学コース	竹本 幹夫	能楽を中心とする日本中世文学の研究を専門としており、鎌倉・南北朝・室町期から近世初期の文学までも視野に入れた研究指導を行っている。能楽という分野の関係上、文学的方法のみならず、演劇的な研究方法も導入している。その理由は、この時代の文学の特質にある。中世後期の文学は、南北朝前後に出発点があり、韻文・散文・演劇・芸能の諸分野に分岐した。その表現形態は多様であるが、作品相互で物語世界を共有する例が多い。さらに和漢の修辞を敷衍した七五調の美文体などに、近世文学への萌芽を認めることが出来る。現在は、博士後期課程では世阿弥能楽論の輪読を、また修士課程では『看聞日記』解読作業を授業の中心内容とし、軍記文学や寺社縁起の諸本研究についても、個別の指導を行っている。
日本語日本文学コース	十重田 裕一	現在、1920年代から50年代の近代日本文学と文化を専門に研究しています。研究テーマは、新感覚派を中心とする日本のモダニズム文学の研究、文学と映画の芸術交流の研究、出版メディアと文学の研究、第二次世界大戦後占領期検閲と文学の研究、近代日本文学における本文の研究など。研究対象とする作家は、横光利一、川端康成、堀辰雄、井伏鱒二、谷崎潤一郎、坂口安吾など。今後五年のあいだに推進予定の研究テーマは、「新感覚派文学の歴史的研究」「総合雑誌における占領期検閲と文学との相互関連性の研究」「出発期「文藝春秋」にみる1920～30年代のマスメディアと文学の展開」などです。
日本語日本文学コース	鳥羽 耕史	日本近代文学専攻。20世紀後半の日本文学について、文化運動や社会運動との関係や、映画、美術、演劇、テレビなど、他ジャンルとの交流に注目しながら研究している。1950年代のサークル運動、戦後の記録映画、幻灯、学生運動、近代の座談会、文壇について、国内外の文学、歴史学、社会学、思想史、映画学、教育学などの専門家との共同研究も数多く行っている。これまでに安部公房、杉浦明平、開高健、石川淳、富士正晴、小松左京、筒井康隆、貴司山治や、ダムや東京タワーの建設と記録映画、映画『蟹工船』、雑誌『人民文学』、『総合文化』、中国の影響を受けた連環画などについて研究してきた。現在は安部公房の評伝に取り組みながら、サークル運動を中心とする戦後文化運動をグローバルな文脈に位置づける試みを続けている。
日本語日本文学コース	宗像 和重	日本近代文学および近代の書物と出版に関する研究。坪内逍遙・森鷗外・尾崎紅葉らの文学テキストを中心として、明治から大正にかけての近代文学成立・形成期の諸相に目を向け、その展開を多角的に跡づけることを目標としている。また、近代文学が「活字の世界」(前田愛)の所産であることから、原稿をはじめとする肉筆資料類や、印刷・出版・書物など、近代文学に関わる活字媒体の考察を通して、文学作品の生成と流通、そして受容の過程をより具体的に検証したいと思っている。
日本語日本文学コース	森山 卓郎	現代日本語文法の記述的研究をしています。特に、文末表現を中心に、言葉の中の論理と認知の関わりについて考えてきています。近年、関心は、文法研究を軸にしつつも、それだけではなく、語用論的観点も含めたコミュニケーション論、文学的表現の文法的分析、外国語と日本語の対照研究、音声と文法との関わり、などにも広がっています。同時に、言葉に着目した国語教育、日本語教育など、応用的研究も大切だと思っています。
英文学コース	梅宮 創造	イギリス近代文学。とりわけ、ヴィクトリア朝文学とその背景を精査するところに近代精神の特異な展開をみる。扱う作家としては、ディケンズ、ワイルド、ギッシング、またその周辺となるが、ジャンルにはこだわらない。シェイクスピアも避けては通れない。
英文学コース	江田 孝臣	19、20世紀のアメリカの詩。19世紀ではEmily DickinsonとWalt Whitman。20世紀ではWilliam Carlos Williams, Ezra Pound, T. S. Eliot, Hart Craneらモダニスト詩人。とくにその長篇詩。ポストモダニスト詩人ではCharles Olson。19世紀のHenry David Thoreauの散文、20世紀の環境文学(Nature Writing)にも関心あり。
英文学コース	大島 一彦 (学生募集なし)	<専門分野>イギリス小説 <主な研究対象>ジェイン・オースティン、ジェームズ・ジョイス、D・H・ロレンス、ヴァージニア・ウルフ、オリヴァー・ゴウルドスミス、チャールズ・ラム、エリザベス・ギャスケル、キャサリン・マンスフィールド、H・E・ベイツ、20世紀前半までのイギリス小説史。 <その他特に関心のある作家達>ダニエル・デフォウ、ヘンリー・フィールドینگ、ロレンス・スターン、サミュエル・ジョンソン、ブロンテ姉妹、トーマス・ハーディ、サマーセット・モーム、クリストファ・イシャウッドなど。 <研究形態>作品論、作家論、比較作家論、作家評伝、作品の翻訳と解説など。
英文学コース	小田島 恒志	ロレンスを中心にモダニズムから今日にいたる現代イギリス小説。現代(特に今日の)英米演劇、およびその翻訳論。

コース名	氏名	専門分野内容
英文学コース	都甲 幸治	専門は現代アメリカ文学・文化。主に1970年代以降を扱っている。研究している作家はドン・デリーロであるが、レイモンド・カーヴァー、リチャード・ブローティガン、マーガレット・アトウッドなどにも興味がある。著書に『21世紀の世界文学30冊を読む』(新潮社)、『偽アメリカ文学の誕生』(水声社)、訳書にチャールズ・ブコウスキー『勝手に生きろ!』(河出文庫)、ドン・デリーロ『天使エスメラルダ』(新潮社、共訳)、ジュノ・ディアス『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』(新潮社、共訳)などがある。
英文学コース	棚木 伸明	アイルランド文学・文化を研究している。主な研究対象は、W. B. イェイツおよびそれ以降の現代詩(シェイマス・ヒーニー、キアラン・カーソンなど)。また、ウィリアム・トレヴァー、コラム・トビーンをはじめとする小説や、現代文化のなかの口承文化・伝統音楽などにも深い関心がある。
英文学コース	冬木 ひろみ	16, 7世紀のイギリス演劇、特にシェイクスピアを中心とするエリザベス朝演劇の研究。時代と舞台への考察を常に行いながら深く劇作品のテキストを読み、世界でも例を見ない演劇の黄金期を、今現在を生きる者の視点と感性で深く掘り下げてゆくことをモットーとしている。演劇博物館COEでの成果も生かして、新たなシェイクスピア批評を開拓するとともに、大学院生の論文・発表の支援を精一杯してゆきたい。
英文学コース	堀内 正規	●19世紀アメリカ文学—私の主な専門領域は、いわゆる<アメリカン・ルネッサンス>と呼ばれることもある、19世紀中葉のアメリカ文学です。過去の研究歴から言えば、中心となるのはHerman Melville とRalph Waldo Emerson で、同時代に全く対照的とも言える世界観を提示したこの二人の書き手、その両極を往き来する点に、研究者としての私の特徴があるでしょう。Hawthorne や、Emily Dickinson についても論文を書いています。この時代の文学に限らず、20世紀のアメリカ文学や文化にも強い関心があります。
英文学コース	マーティン アントニー	“Shakespeare and Renaissance Drama: Stage, Print, Screen” This class will look at the development of Shakespeare's drama from its initial production on the stages of the London theatre in the 1590s and 1600s, through the first printings of texts, the later editorial manipulations of texts, and the various modern and recent versions and adaptations as presented in cinema and on television. The class will be concerned with the “sociology” of Shakespeare's plays: that is, we will consider the meaning of the plays not only as the creation of a unique author, but as constructed by producers, directors, actors, printers, editors and by audiences and readers at different points in location and time. Texts will include Titus Andronicus, Romeo and Juliet, Hamlet, The Tempest, and Marlowe's Doctor Faustus.
英文学コース	ライアン スティーブン	言語学習心理学、英語学習者のモチベーション
英文学コース	渡辺 愛子	専門は「現代イギリス地域研究」で、ディシプリン横断的なアプローチに関心がある。現在は、イギリス外交史における文化と政治の共謀関係について研究中。最近の大学院担当科目では、文学や作家を現代史や思想史というコンテキストにおいて再考したり、文学(作品)と文化理論との関連を扱っている。
仏語仏文コース	川瀬 武夫	主たる専門研究分野は、ロマン派(ラマルティエヌ、ユゴー、デボルド=ヴァルモール)の台頭から、ボードレールによる近代性modernite の確立を得て、高踏派(ルコント・ド・リール、バンヴィル)や象徴派(ヴェルレーヌ、ランボー、マラルメ)へとつながる19世紀フランス詩。さらに、アポリネールにはじまり、シュルレアリスムを経由して、ポンジュやボヌフォワに至る20世紀フランス詩の系譜もカバーする。一方で、日本とフランスの近代詩の比較研究や、17世紀から20世紀にかけてのフランスにおける文学と隣接する諸ジャンル(絵画、音楽、舞台芸術)との比較研究にも深い関心を有している。
仏語仏文コース	鈴木 雅雄	20世紀フランス文学。特にダダやシュルレアリスムなど、いわゆる「前衛」的文学芸術運動に関する研究。 また20世紀の文学・芸術と、同時代の哲学思想や人文科学(人類学、精神分析、など)との関係という問題の全般に関心を持っている。
仏語仏文コース	瀬戸 直彦	中世フランス文学(オック語・オイル語)、文献学、テキスト校訂。 中世の南仏抒情詩(トルバドール)の作品研究を中心に、テキストの正確な読解、そのための写本校合にとくに関心をもっている。12-13世紀の詩人たちが、いかに精緻な詩を創作したか、それを現代のわれわれがいかに読むかという問題を、さまざまな参考文献を悉皆調査のうえ、きわめていきたいと考えている。

コース名	氏名	専門分野内容
仏語仏文コース	デュストド オディール	Litterature francaise fin XVI ^e ~XVIII ^e siecle. Reception de la mythologie greco-latine en France XVI ^e ~XVIII ^e siecle.
仏語仏文コース	芳川 泰久	19世紀から20世紀におよぶフランス小説、20世紀後半以降の批評について研究指導します。とりわけ近代以降の認識論的な布置の変化がどのように小説的言説にかかわっているか、といった問題に焦点をあてる。
独語独文コース	クラヴィッター アルネ	ドイツ近現代文学、比較文学、文学理論、解釈学
独語独文コース	藤井 明彦	「専門分野」は社会言語学的観点からの「初期新高ドイツ語」(14~17世紀のドイツ語)の研究。具体的には、15世紀に登場した活版印刷メディアと当時の言語変化との関連を探るために、ドイツ語の揺籃期本に関しては最も生産的であった南ドイツの都市アウクスブルクの印刷言語を研究している。「関心分野」は言語学をモデルにした一般記号学の領域。特に音楽と建築を対象にした記号美学の構築に関心がある。
独語独文コース	村井 翔 (学生募集なし)	フロイトの研究者で、アプローチの仕方としては1980年頃にはやった脱構築批評という古風な(しかし今でもインパクトを失っていないと信じる)方法をとっています。すなわち、フロイトの精神分析理論を彼自身のテキストに適用することによって、彼の死角になっている無意識の部分をあぶり出すというやり方です。文学理論としての脱構築批評(ド・マン)、ディスクール分析(キツラー)やフロイトの時代である世紀転換期ウィーン文化の諸相(クリムト、マラー、ホフマンスタール、ムーゼル、ヴェイトゲンシュタインなど)も私の守備範囲です。
独語独文コース	室井 禎之	専門分野はドイツ語学および言語学です。そのなかでも特に語彙の意味の問題を中心に研究しています。基本的に認知意味論の立場をとっていますが、意味をコミュニケーション行為のなかで発生し、定着するものと考えますので、関連性理論などの語用論も当然視野に入れていきます。分析対象にしている言語は主としてドイツ語と日本語です。ドイツ語についてはコロケーション分析を重要な分析手段として用いています。
独語独文コース	山本 浩司	ドイツ語圏の現代文学・現代文化を専門とするが、なかでも大きな関心は以下の諸分野に向けられている。1) オーストリア現代文学(バツハマン、アイヒンガー、ハントケ、ベルンハルト、イェリネク、ヴインクラーら)。2) 戦後の詩論的抒情詩(バツハマン、ツェラン、アイヒ、ボプロウスキー、フーヘル、トーマス・クリングら)。3) ヘルタ・ミュラーら東欧系作家によるドイツ語文学。4) 1989年以降のドイツ文学(特に旧東独の作家、カーチャ・ランゲ=ミュラー、ヴォルフガング・ヒルビヒ)。5) 現代小説にみる性愛と暴力の表現(マゾヒズム小説、テロ小説)。7) 現代文学における間メディア性(トーマス・クリング、シュタインエッカー)6) ニュー・ジャーマン・シネマ(ファスピンダー、ヴェンダースら)。
露語露文コース	伊東 一郎	ロシア文学、スラヴ文化史、スラヴ比較民俗学。ロシア文学では民話、民謡などの口頭伝承、11~17世紀にかけての中世文学、18世紀文学を、スラヴ文化史では中世ロシア文学と中世ブルガリア文学、17世紀ロシア文化とポーランド、18世紀ロシア文化とイタリア、ウクライナ文化史におけるゴーリなどを、スラヴ比較民俗学では、スラヴ神話、スラヴ民間信仰、スラヴ民衆暦、スラヴ農耕儀礼歌などを専門研究分野とする。
露語露文コース	貝澤 哉	19世紀末から20世紀初期のロシア文学・文化史、文学生産の場の社会史的研究。 ロシア・フォルマリズム以後の文芸学、文学理論、文化理論(ハフチンを中心とする)。 20世紀初期のロシア思想(フロレンスキイ、カルサーヴィンなど)。
露語露文コース	坂庭 淳史	19世紀ロシア文学・思想研究:主にフォードル・チュツチェフ、哲学サークル愛智会、チャアダーエフ、スラヴ派など、1820-60年代の詩と思想について、当時の社会情勢やロシアと西欧の関係、出版状況と合わせて研究しています。またそれらの研究成果を踏まえ、プーシキンやドストエフスキーといった19世紀ロシアの作家たち、さらに20世紀のタルコフスキー父子の創作についても考察を進めています。
露語露文コース	源 貴志	専門分野は第一に、19世紀ロシア文学ですが、指導範囲としては、18世紀末の文学状況や20世紀のロシア革命前後までの主として散文文学を含みます。第二は、二葉亭四迷を中心とした、日露比較文化です。主として明治以降の日本文学へのロシア文学の紹介とその影響をテーマとしますが、江戸時代の漂流民記録にはじまり、広く日本とロシアの文化的な交流史を扱います。第三は、ロシア近代の出版文化です。広い意味での書籍文化研究から狭義の書誌学(目録学)と文学研究の関連を扱います。

コース名	氏名	専門分野内容
中国語中国文学コース	稲畑 耕一郎 (学生募集なし)	中国古代学。中国の古代の文化事象について、伝来の文献と新出の出土資料を用いて考えようとする学問。中国における伝世文献の多いことは、周知の通りであるが、一方で、大地からこれまでまったく知られなかった新しい出土資料が日々もたらされるようになった。古代は、私たちにとって最も遠い世界であるが、資料は毎年のように更新され、常に新しい姿を持って私たちの前に立ち現れてきている。文学、史学、哲学、考古学といった近代に成立した枠組みをひとまず取り払い、本来それらが渾然不可分であった世界を、いま一度文化史的な側面から捉えなおし、その今日的意味を考えようとしている。
中国語中国文学コース	岡崎 由美	中国近世の小説、戯曲。近現代の武侠小説。「通俗」或いは「同工異曲」といった評価のもとに扱われがちな大衆文芸の独自の表現力や世界観を探究している。また、日本における中国古典戯曲の受容についても研究を進めている。
中国語中国文学コース	千野 拓政	文化システムの変化という視点から、中国近現代文学・文化を研究している。近年関心を持っているテーマは次のとおり。1. 近代文学の誕生：近代文学形成時に、純文学・エンターテインメントを通じて生じた根源的な変化についての考察。2. 東アジアの若者文化：日本・中国をはじめ東アジアの都市に共通する文化現象（サブカルチャーや村上春樹の流行など）が意味するものについての調査・分析。3. 中国同時代文学の翻訳・批評。4. 中国映画の紹介・批評。
中国語中国文学コース	内藤 正子	中国語の語彙・文法論、表現・文体論を中心に、日本語や英語等との比較対照研究、及びこうした研究の基礎となる種々の言語理論について考察している。特に、字本位理論 (sinogram-based theory) は中国語の構造や特徴を解明する為の最適な枠組みであると同時に、既存の意味論や語用論にとらわれない新しい意味研究やコミュニケーション研究に大いに活用できると考え、関心を持っている。
中国語中国文学コース	古屋 昭弘	中国語を中心とする東アジア諸言語史。特に文字論と音韻論を専攻。中国語音韻史では戦国出土資料による上古音、六朝～宋の韻書・字書を主要資料とする中古音、元明清の韻書・字書や外国資料による近世音を研究。広東語や上海語などの現代の諸方言やチベットビルマ系、タイ系の言語も参照。文字関連では漢字のほか、ハングル、チュノム、パспа文字、西夏文字などを勉強中。
中国語中国文学コース	楊 達	コンピュータを使った中国語教育の理論と実践。また、その学問的背景として、認知言語学の観点からの中国語研究。視知覚と量詞との相関、「情報のなわ張り」理論に基づく副詞や語気助詞の研究。
演劇映像学コース	児玉 竜一	日本の古典演劇、とりわけ歌舞伎・人形浄瑠璃を主たる研究対象とする。近世期から、近現代の伝承にまで範囲は及ぶため、近代の芸能史全般、演劇評論史に及ぶ周辺領域をカバーする。
演劇映像学コース	小松 弘	映画史学。専門は無声映画。特に欧州諸国、アメリカそして日本の無声映画史を扱う。
演劇映像学コース	鈴木 晶	研究指導の範囲は、クラシック・バレエからヒップホップにいたるまで舞踊学全般。本人が専門的に研究してきたのは、欧米の劇場舞踊史、とくにバレエの歴史的研究であり、さらに狭く絞るならば、19世紀フランスのロマンティック・バレエと、20世紀初頭のバレエ・リュス、そして現代バレエである。加えて近年は、ハリウッドのミュージカル映画を集中的に研究すると同時に、バレエの姉妹ともいべきシンクロナイズドスイミング、フィギュアスケート、新体操の文化史的研究もしている。
演劇映像学コース	武田 潔	専門分野は映画理論。主な研究テーマは映画における自己反省作用とフランス映画言説史。博士論文『映画における自己反省作用に関する言説のアルケオロジー』(フランス国立社会科学高等研究院, 1986年)。著書『明るい鏡—ルネ・クレールの逆説』(早稲田大学出版部, 2006年)ほか。
演劇映像学コース	藤井 仁子	映画史、映画理論。1930年代の日本映画、とりわけ成瀬巳喜男監督作品の研究から出発し、同時期の文化映画についても言説分析の手法を用いて研究した。映画評論家として活動するようになるにつれて現代映画に関する発言の機会が増え、現在では日本映画とアメリカ映画、ならびにドキュメンタリー映画全般を主な研究対象としている。英語圏の豊かな研究蓄積を踏まえつつ、一貫した関心は、フィクションと歴史が結びうる複雑な関係をフィルム・テキストの表層において解明することにある。

コース名	氏名	専門分野内容
演劇映像学コース	藤井 慎太郎	演劇学、芸術文化環境学。フランス語圏(フランス、ベルギー、カナダ)、英語圏、日本を中心に現代舞台芸術の美学と制度を研究している。主な著作に『ポストドラマ時代の創造力 新しい演劇のための12のレッスン』(監修、白水社、2014年)、『芸術と環境 劇場制度・国際交流・文化政策』(共編著、論創社、2012年)、Théâtre/Public, no.198, "Scènes françaises, scènes japonaises : allers-retours"(共同責任編集、2010年)など。
演劇映像学コース	和田 修	日本近世芸能史
美術史学コース	内田 啓一 (学生募集なし)	日本美術史、特に平安時代、鎌倉時代、南北朝時代の仏画や図像、そして版画についてが研究テーマである。密教や浄土教などの思想背景やそれにとともなう信仰形態を考えながら、絵画の技法的な面や描かれた制作背景、そして制作目的を考察するものである。研究方法は作品調査を基本として、法量や写真などのデータを集め、関係論文や諸資料をふまえてひとつひとつの作例を丁寧に考え、他の作例との関連性などを見いだすものである。
美術史学コース	坂上 桂子	美術史。近現代の西洋美術を中心とするが、時代や地域を越えて、異文化接触、異文化交流の問題を考えることが近年の中心的課題である。西洋における日本美術の受容(ジャポニスム)、日本における西洋美術の受容の問題など。
美術史学コース	成澤 勝嗣	日本近世絵画史研究
美術史学コース	肥田 路美	東洋美術史とくに中国仏教美術史。印度的要素の絶えざる受容と、漢魏以来の宗教観や造形表現との習合が、どのようにして中国仏教美術を生成してきたかを中心に、その規範性と伝播の問題、皇帝権との関係、世俗美術との関係などを研究している。最も関心をもっている時代は唐代である。また、四川地域をフィールドとして石窟摩崖造像の日中共同調査を継続的に実施している。
美術史学コース	益田 朋幸	ビザンティン美術史、キリスト教図像学。講義では専門のビザンティン美術、キリスト教図像学に関する話をするが、演習では学生各自の関心に応じた研究発表を広く行ってもらうことになる。「時間の表現」、「イメージとテキスト」、「アイコンとナラティブ」といった共通テーマを設定して発表してもらう場合もある。最近の私自身の研究は二つの系統に要約される。1)後期ビザンティン聖堂装飾プログラム、2)レクシヨナリー(典礼用福音書抄本)写本の挿絵と聖者暦
日本史学コース	海老澤 衷	日本中世の荘園における水利システムを中心に研究を進めている。大学院授業で今までに調査を行ってきたフィールドは、播磨国矢野荘、紀伊国鞆淵荘・隅田荘・粉河寺領、伊賀国黒田荘、対馬、伊予国弓削島荘、山城国上桂荘、備中国新見荘などであり、さらに東南アジア諸地域における水利システムとの比較に視点を広げている。対象としているところは、インドネシアのバリ島、中国の雲南省・四川省・広西チワン族自治区、カンボジアのシェムリアップ周辺などである。
日本史学コース	大日方 純夫	日本近代史。もともとの専門は、内務行政史とくに警察史の研究と、自由民権期の政治史とくに政党史の研究であるが、近年は、対外関係史・都市史への関心を強めている。政治史的な接近を基本とするが、それにとどまらず、社会史・文化史などを含め、広く近代日本の全体像を把握することを目指している。
日本史学コース	川尻 秋生	日本古代史専攻。とくに平安時代を専門とする。海上交通・平将門の乱を中心とした東国史、寺院を中心とした仏教史、格式を中心とする法制史、日本と中国の法制度の比較などをおもな研究対象にしている。また、現在は、古代史と中世史、歴史学と考古学・文学との協業の必要性を感じ、これらを総合しつつ、幅広い視野を持った研究を志向している。現在の演習では、『類聚三代格』をテキストに用い、史料を厳密に読んでいる。その上で、法制史料としての解釈、実態を示す史料としての解釈を行い、これまでにない意味内容を見出すことを、受講生一同とともに目指している。
日本史学コース	久保 健一郎	日本中世史を専攻。特に中世後期および中近世移行期の権力構造論や戦争に関わる種々の事柄について追究している。

コース名	氏名	専門分野内容
日本史学コース	新川 登亀男 (学生募集なし)	日本古代史研究を専門にしている。その主要な研究テーマは、以下のとおりである。1)アジア(朝鮮半島・中国大陸・東南アジア以西の一部を視野に入れる)との関係において、古代日本列島の歴史と文化がどのように成立し、展開していくのかということ、主として文字資料の多角的な読み込みから分析し、再構成していく。2)古代日本列島のなかの諸地域における歴史と文化の差異性に注目し、その自覚・解体・融合・統一などの諸問題を、アジアとの関係に留意しながら歴史的に解明する。3)日本古代史をこれまでどのように理解してきたのかということ自体を研究対象として、私たち自身の古代史研究の現在を実践的に問い直し続ける。
日本史学コース	谷口 眞子	日本近世史専攻(江戸時代の政治文化・法・思想史)。江戸時代は軍人たる武士が政権を握り、軍隊が常駐していたにもかかわらず、二百数十年間、戦争がない時代であった。それが日本近世の政治・社会・文化や法・裁判、武士の心性などにどのような影響を及ぼしたのか、研究をしている。現在は、軍事史的観点からみた18～19世紀の名誉・忠誠・愛国心の比較研究、戦国時代から明治時代に至る武士道論と兵学、殉死、赤穂事件と「忠臣蔵」文化の形成・受容、朝廷・幕府・諸藩によって行われる恩赦について研究している。
日本史学コース	鶴見 太郎	日本近現代史を専攻。特に大正・昭和戦前期の文化史・思想史を主領域にしている。この時期、日本の郷土研究は飛躍的にその基盤を整えるが、そこで構築された思想世界は、戦時下に於いて経験的、物証的な研究が可能な希有の環境となった。その要因について柳田国男と彼を中心に形成された民俗学を検証することで、その実像に迫る。
日本史学コース	真辺 将之	日本近現代史専攻。特に明治期の思想と政治を専門とする。思想史と政治史とはともすれば別個の枠組みのなかで没交渉的に行われがちだが、細かな政局史的叙述に陥りがちな政治史研究を思想史や文化史と結び付けることによってより広い視野から政治をとらえかえすとともに、思想を細かな政治状況のなかに位置づけることによってその生成・展開のダイナミズムを明らかにし、思想史と政治史との橋渡しを行うことを意識して研究をすすめている。現在、具体的には、明治期の「欧化」と「反欧化」、近現代日本の政党認識、明治から戦後に至る早稲田大学史、ならびに大隈重信研究といったテーマに取り組んでいる。
東洋史学コース	石見 清裕	中国の魏晋南北朝～隋唐時代の政治史、国際関係史。具体的には、当該時代の宮廷政治や儀礼、律令制、墓誌に見る墓葬のほか、外交関係や民族の接触・融合のあり方、ひいては日本の遣唐使まで、幅広い分野を専門とする。したがって、扱う史料も編纂歴史書ばかりでなく、法律書、儀式書、古文書、石刻など多岐にわたる。中国の歴史は、狭義の中華世界でのみ解釈するのではなく、広い視野でユーラシア史に位置づけて考えねば、正確な歴史の展開像はつかめない。常にその点を心がけて研究している。近年のテーマは、中国におけるソグド人集落のあり方や、唐宋変革における沙陀族の意義など。
東洋史学コース	大稔 哲也 (学生募集なし)	中東社会史、エジプト史、ムスリム社会研究、中東民俗学
東洋史学コース	工藤 元男	中国古代史を専門とする。文献史料のみならず、竹簡・木簡・帛書等の出土文字資料(簡牘)を駆使して、中国古代の国家・社会・民俗・宗教等の実相を復原することをめざしている。具体的には、中国西北から西南に向かって南下した古代西羌の遷徙ルート、秦の統一過程における秦人の移動過程等を文献史料をもとに現地調査している。また戦国楚・秦代・前漢初期の簡牘資料の解読を通じて、秦漢帝国の成立にともなって、中国各地の地域文化がどのように編入され、かつ消失していったかを検討し、またその後これらの地域文化がどのように再び立ち上がってくるのかを、巴蜀(四川)や楚(湖北)を地域モデルとして研究している。
東洋史学コース	柳澤 明	清朝史を中心とする16～19世紀の東アジア史。最近は特に次のようなテーマに関心を持っている。1)清帝国の基幹システムの一つである八旗制の歴史的展開。八旗の種々のタイプと、それに属した人々の社会・文化変容。2)清朝をめぐる国際関係。特に清-ロシア間の外交交渉と、両国間に位置するモンゴルや東北(満洲)の諸民族の動向。また、こうした内陸部における国際関係・民族関係を、いわゆる朝貢システムとどのように関連づけるかという問題。
東洋史学コース	李 成市	紀元前2, 3世紀から紀元後10世紀に至る時期に、中国東北地方から朝鮮半島にわたる地域で形成された諸国家(古朝鮮、高句麗、新羅、百濟、加耶、渤海)の歴史・文化研究および、それらの諸国家と同時代の中国王朝や、古代日本との関係史を中心とした東アジア史研究に従事している。現在取り組んでいる課題は、高句麗・新羅の石碑や、新羅・百濟の木簡など出土文字資料を通して、中国文明との接触、葛藤を経ながら、この地域に形成された地域文化の特質の解明をめざしている。その他に、日本統治下の植民地期を中心とする朝鮮古代史研究の史学史や、日本・韓国・中国における古代史研究を中心とする歴史認識問題に取り組んでいる。

コース名	氏名	専門分野内容
東洋史学コース	飯山 知保	中国華北社会史
西洋史学コース	井上 文則	専門研究分野は、ローマ帝国史。特に3世紀の軍人皇帝時代のローマ帝国政治史を専門としている。また当時流行したミトラス教についても関心をもっている。
西洋史学コース	井内 敏夫 (学生募集なし)	ポーランドの歴史を研究領域としているが、これまでに取り組んだ問題は、19世紀の民族解放運動、18世紀の国制改革運動、16-18世紀のジェチボスピタの政治文化、中世の国制ならびに社会経済構造である。研究指導上の守備範囲は東欧とロシアの歴史と考えている。
西洋史学コース	甚野 尚志	中世ヨーロッパ史を専門としている。教会史、文化史、社会史に主たる関心をもちながら研究を行ってきた。研究の柱のひとつは、中世の思想と文化をめぐる諸問題で、これまでカロリング期から12世紀ルネサンス期の聖職者知識人の社会認識・教会論・歴史意識などを分析してきた。またもうひとつの柱は、中世の教会と社会をめぐる諸問題で、正統と異端、教皇の儀礼と権威、公会議と教皇権、地域の司教座と都市との関係(とくにコンスタンツ)をめぐる問題を論じてきた。
西洋史学コース	前田 徹 (学生募集なし)	古代オリエント史の中でも最初期のシュメール史を研究する。初期王朝時代、アッカド王朝時代、ウル第三王朝時代と続く紀元前2500年からの500年間に主な対象である。シュメール語史料はおおまかに、1)行政経済文書、2)王碑文、3)王讃歌を含む文学作品に分けることができる。これらの楔形文字史料を分析することで、シュメール王権の発展を通史的に捉え、その特質を明らかにすることが現在のテーマである。
西洋史学コース	松園 伸	研究対象はイギリス近現代史一般。とくに18~19世紀ブリテンの政治・社会、スコットランド史に関心を持っている。
西洋史学コース	村井 誠人 (学生募集なし)	北欧近現代史で、北欧各国の民族ロマン主義の展開、および国民国家の枠組をめぐる国境問題を研究。主に、デンマーク・ドイツ間の国境問題に焦点をあて、19世紀前半から20世紀いっぱいを対象に西洋史・歴史地理学の論文をものしている。受け入れ学生としては、北欧近現代史を研究しようとするもの。
西洋史学コース	森原 隆	近世・近代フランス史を専門とする。社会史および社会文化史的観点からアンシャン・レジーム期、革命期の政治・社会・文化の諸問題、とりわけ出版文化、ジャーナリズム、知識人等について考察している。
考古学コース	近藤 二郎	専門研究分野は、エジプト学およびエジプト考古学である。特に古代エジプト新王国時代における葬送の問題に関心を持つ。ナイル川の上流、上エジプトの中心地であるテーベ西岸のネクロポリス・テーベにおける墓域の形成と変遷を主として扱っている。テーベ西岸地域においては、第11王朝が北のヘラクレオポリスを拠点とする第10王朝と覇権を競う時期から、墓域が形成されるようになる。その後、第2中間期から新王国時代になるとエジプトを代表する墓域へと発展していく。岩窟墓の形態の変遷、再利用のあり方、王墓の形態と選地、墓作りの組織等をヒエログリフによる文字資料、考古学資料等を多角的に駆使することによって解明することを目指す。
考古学コース	城倉 正祥	東アジア考古学(古墳・寺院・都城)を専門とする。特に、中国における都城制の発展と東アジアへの展開過程に関して、発掘遺構の分析・衛星画像のGIS(Geographic Information System)分析などの方法を用いて研究を進めている。また、日本では千葉県を中心に古墳・寺院のデジタル測量・GPR(Ground Penetrating Rader)・発掘調査などを進めている。最新のデジタル技術を駆使して、古代東アジアの歴史性を考究している。
考古学コース	高橋 龍三郎	日本先史時代の社会と文化を専門に研究する。主に縄文時代を扱うが、旧石器時代、弥生時代も対象とする。特に社会的側面に光を当てる。今日の複雑で階級化した社会への先駆をなし、その基盤をなす脱平等化・階層化過程の社会は、縄文時代に胚胎し、弥生・古墳時代の階層化社会を経て、やがて古代国家にいたる。その過程の解明は、先史学研究の核心をなすもので、発達した現代の考古学で注目されている。それには発掘調査のデータだけでは、確かな推測は不可能で、未開社会等のデータを背景に社会人類学的に構築された理論的研究を参照する必要がある。理論的研究を目指しているが、前提となる土器型式編年学や集落、墓制なども研究している。
考古学コース	田畑 幸嗣	東南アジアの考古学、地域研究、世界遺産研究。主要なフィールドはカンボジア。主な関心は東南アジア産陶磁器の生産と流通、東南アジアにおける貿易陶磁器研究、モニュメンタリティーに欠ける文化遺産の保存と修復活動。最近では、陶磁貿易が在地陶器生産に与えた影響について主に研究を進めており、消費地遺跡と生産遺跡の発掘調査を行っている。

コース名	氏名	専門分野内容
考古学コース	寺崎 秀一郎	中南米地域の考古学研究。現在はマヤ地域、ホンジュラス共和国コパン県での野外調査を継続中。主要なテーマは、マヤ古典期(AD 250～900年頃)における地方センター(二次センター)の形成過程について、コア・エリアとその周縁部との政治的・経済的関係を検証し、コア・エリア中心史観(王朝史研究)とは異なる視点からの「複雑な社会」の解明。また、ラテンアメリカ地域特有の先住民文化遺産／資源をめぐる現代社会との関わりについても取り上げ、先住民文化の過去と現在を考える。地域研究としての性質上、英語、スペイン語の読解能力を要する。
考古学コース	長崎 潤一	専門分野は北方考古学、旧石器考古学。北海道を主なフィールドとしている。主要なテーマは更新世から完新世における日本列島への人類の移住、拡散、適応についてである。北海道は大陸からの人類集団の移動経路として、また北東アジアにおいて調査が最も進展している地域として重要性が高い。演習でも「北海道」の旧石器時代からアイヌ期までの諸文化をテーマとして取り上げることが多い。また火山灰学、地理学、年代測定学、地球環境変動史、民族誌的知見などと石器研究を統合した旧石器考古学の確立を目指している。現在関心を持つ研究分野は、細石刃石器群を保有する人類集団の遊動領域論、北海道と本州島の旧石器集団の居住パターンと社会構造の比較、環境指標としての局部磨製石斧論、後期旧石器前半期の環状ブロック群の社会生態学的位置づけなどである。
文化人類学コース	國弘 暁子	文化人類学を専門として、特にジェンダー、宗教に関わるテーマに関心を持つ。インド、グジャラート州において、ジェンダーの境界線を超えて女神に帰依する人々(一般にはヒジュラとして知られる)と共にフィールドワークを実施した経験を持ち、ジェンダー規範に基づく親族関係のあり方や宗教空間での贈与の意義についての考察を行う。
文化人類学コース	西村 正雄	〈フィールド〉:日本, フィリピン, カンボジア, ラオス。現在ラオスにて、フィールドワーク中。 〈主関心分野〉:理論的に、システム論を基礎にした、文化変動, 変容する物質文化, 及び組織論。国家の形成及び、その崩壊, 変動のプロセス。また、世界遺産のマネジメントと、開発の問題の文化人類学的研究。
表象・メディア論コース	岡室 美奈子	現代演劇論、テレビドラマ論、オカルト芸術論(モダニズム期中心)、アイルランド文学・演劇・文化論。特にサミュエル・ベケットの演劇・テレビドラマ・映画の研究を専門とし、メディア論的視点やオカルト的視点からも幅広く考察している。
表象・メディア論コース	草原 真知子 (学生募集なし)	メディア技術、メディア表現、社会・文化の相関関係を研究し、専門分野としてはメディアアート、デジタルメディア論(情報メディア学など)、メディア考古学(映像文化史)にまたがっている。今日的な問題としてはCG・インターネット・拡張現実感・生命工学などがもたらした「リアル」の変容とコミュニケーションの変化、メディアアートの意味と役割、日本の戦後前衛芸術運動と今日のメディアアートの関係性などがテーマ。歴史的な部分では写し絵やパノラマ館など当時の最先端映像技術による大衆娯楽をメディアという視点から研究している。
表象・メディア論コース	坂内 太	身体表象論、演劇論、パフォーマンス・スタディーズ、アイルランド現代演劇・モダニズム文学研究。「身体」及び「身体の表象」を主たる問題としながら舞台芸術、文学、写真、映画などの多領域を横断しながら考察を行う。
表象・メディア論コース	丹尾 安典	近現代美術史を主たる専門分野とするが、かならずしも「専門」の枠にかぎって研究をしているわけではないので、演習では広範なテーマを設定し、学生それぞれが自分自身の研究と関連付けながら、視覚イメージを考察できるように指導している。 過去に演習でとりあげたテーマを例示すれば、「戦争と美術」「性と美術」「美術史の歴史」「健康と美術」「美術/美術史の規矩」「身近なるものをめぐって」「破壊のイメージ」等があげられる。
表象・メディア論コース	橋本 一径	表象文化論、西洋思想史、イメージ文化史、身体イメージ論。これまでは自己や他者のアイデンティティの基盤となるイメージの変遷を、「指紋」などを対象として、思想的に跡づける研究をしてきました。フランスの美術史家・哲学者ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンらの思想を手がかりに、人類にとってイメージとは何かという問題について、領域横断的に考察することを目指しています。
表象・メディア論コース	長谷 正人	文化社会学、映像文化論、メディア文化論。人間の文化芸術活動と社会との関係を問題にする。とりわけ写真、映画、テレビなどの映像文化を中心としたメディアテクノロジーが、19世紀以来の大衆的普及のなかで近代社会にどのような影響を与え、人々の意識をどのように変えて来たかを考古学的な視線をもって探求し、それによって現状のメディア文化を批判するような視線を獲得することを目指す。

コース名	氏名	専門分野内容
表象・メディア論コース	藤本 一勇	専門は現代思想、情報メディア論、技術生態学、「ポスト・モダン」論。情報技術や生テクノロジーの発達の中、個や社会や世界の在り方がどのように変貌しようとしているかを、哲学・政治・経済・技術・文化の総合的な観点から研究する。特にフォーコー、ドゥルーズ、デリダ、アガンベン、シモン・ランシエール、バディウを中心とした現代思想の成果を、様々な理系の領域と接続し、生工学時代における新たな思考・価値・政治・倫理の可能性を探っている。
表象・メディア論コース	宮沢 章夫	演劇・文学
現代文芸コース	青山 南	アメリカの現代の文学シーンを観察しながら「これは見逃せない」と思える作家たちの仕事を、長年、翻訳紹介してきましたが、いっぽうでまた、絵本の翻訳をしたり、日本文学の英訳のされかたを調べたりもしてきたので、おのずと「翻訳」にまつわるいろんなことに興味をもつようになりました。フィリップ・ロス、ジャック・ケルアック、ジョン・ディディオン、ジョン・チャーヴァー、レイン・スミス、ジョン・バーニンガムといった作家たちのセンスにはおおきな影響をうけています。
現代文芸コース	市川 真人	文字作品を中心とするコンテンツとそのプラットフォームたるメディアについて、著者による作品生成と読者による作品再生成、両者を結ぶメディアの果たす役割と、それらの連携が広く社会や歴史に付与する影響といった、多様な関係性を踏まえつつ、同時に、そうした環境由来の浮動因子をきよく取り縮減した作品そのものの内在的メカニクスについて、分析してゆくことを試みています。
現代文芸コース	小沼 純一	批評は大学の枠内で閉じてしまうものではありません。むしろ広く一般の場に積極的に露出されるものです。わたし自身は「音楽・文芸批評」というかたちでプロフィールに記されることが多いのですが、場所によって、論じる対象は異なり、しばしば映画やパフォーマンス・アーツについてもふれることがあります。つまりは、関心の対象が何であれ、批評がことばでなされる以上、ある意味”おなじ”フィールドとして捉えている、とでも言ったらいいでしょうか。
現代文芸コース	堀江 敏幸	専門は20世紀以後のフランス文学ですが、本研究科では、日本現代文学を中心に、実作者の立場からの自由な読解を行っています。学部における「批評・創作ゼミ」の延長でもあることから、学生のみなさんには、当然のこととして、論文じたいがひとつの「作品」になりうるような、厳しい思考と表現上の努力が求められるでしょう。
現代文芸コース	松永 美穂	ドイツ現代文学(第2次世界大戦後のドイツ語圏における文学) ジェンダー論(文学・マンガにおけるジェンダーイメージ) 翻訳論と、文学におけるエクソフォニー体験
現代文芸コース	水谷 八也	20世紀の英米演劇が主な領域。特にArthur Miller, Tennessee Williams, Thornton Wilder, Robert Anderson, Lanford Wilson, Ariel Dorfman, Peter Shaffer, Arnold Wesker など。演劇から近代を逆照射することにより、近代が隠蔽、抑圧してきたものに目を向けられるように、「英米演劇の近代」「近代における劇的想像力の行方」というテーマで、20世紀の英米演劇の読み直しを試みている。研究対象が演劇である以上、様々な非・文学的要素が介入することは必然だが、基本的には戯曲を深く読むことに重きを置いている。
現代文芸コース	渡部 直己	担当教員は、文芸批評家として久しく日本文学の「現場」にコミットしつづける一方で、正岡子規・泉鏡花・谷崎潤一郎・中上健次などの作家たちを論ずると同時に、「差別」や「天皇」といった社会的な所与をめぐる文学の様態を研究してきた者である。現在の関心は、これまで探求・親炙してきた創作理論を軸とした近代日本小説における諸技術の通史的分析にある。これらの仕事の底流にはまた、主としてフランス現代思想の生気が流れ込んでいる。研究指導はどうぜん多岐にわたるが、学生の関心にしたがって臨機応変を旨とする担当者は、基本的には、文学をめぐる「技術」と「思想」、「内」と「外」との接触面を体得し、これをみずから実践応用しうる批評的人材の育成をめざすことになるだろう。
中東・イスラーム研究コース	大稔 哲也	中東社会史、エジプト史、ムスリム社会研究、中東民俗学

コース名	氏名	専門分野内容
中東・イスラーム研究コース	小松 香織	オスマン帝国史、トルコ研究
中東・イスラーム研究コース	新規嘱任者1	中世・アラブ・イスラーム史、マムルーク朝史
中東・イスラーム研究コース	新規嘱任者2	湾岸政治史、中東地域研究、イギリス帝国史